しずおか平和の風

No23
2017年３月25日
発行
静岡市
平和委員会
静岡市葵区鷹匠
1-5-8
TEL 253-1854
FAX 252-0785
メール
Peace-City
@mail.707.to

激動の年　今動くとき

静岡市平和委員会第２回理事会　当面の行動

９条改変に突き進む　安倍政権

幼児に帝国憲法下の「教育勅語」を暗唱させる森友学園を持ち上げ、国有地払い下げ問題にまで絡む安倍政権。この政権の下での改憲は絶対許せません。

安保法制＝戦争法の廃止、５月３日、“常盤公園で総がかり行動統一集会”が計画されています。毎月19日に行われている“戦争させない静岡アクション”とともに私たちの粘り強い活動で共同の輪を広げよう。会員は進んで参加することともに、新しい仲間を誘って輪を広げよう。街頭でも賛同の声や拍手が帰ってきます。

トランプと腕を組み　日米軍事同盟の強化

将来にわたり日本を米軍の侵略拠点にする辺野古新基地建設、危険なオスプレイの配備と日本全土での訓練、欠陥機Ｆ35ステルス戦闘機の配備。

オスプレイの東富士演習がエスカレートしています。監視行動とその危険な役割と実態を県民に訴える活動を。県平和委員会のパンフと、今注目の「平和新聞」を周りに拡げよう。

核兵器廃絶に反対する　安倍政権

核兵器禁止条約の締結は被爆国日本と世界の悲願。ところが安倍政権は米国のいいなりになってこの条約の締結に抵抗！

今年の３月と６、７月に開かれる国連総会は、核兵器禁止条約締結が討議されます。広島、長崎のヒバクシャが最後のチャンスと訴えるこの署名、国連総会に向け被爆国日本から賛同署名をいっぱい集めよう。会員は10筆以上の目標を立てて集めよう。

つむじ風

民主主義の危機

政府は３月10日の夕刻、南スーダンＰＫＯに派遣している陸上自衛隊を５月末で撤収することを発表した。昨年９月、安倍政権は強引に戦争法を成立させ、その最初の具体化として「駆けつけ警護等」新任務を付与した部隊を11月に派遣した。現地では７月に「戦闘」が起こり、ＰＫＯの五原則が崩れているにもかかわらず「戦争」の実績づくりを急いだのだ。しかし、現地の状況悪化と国民世論の反発と自衛隊の情報隠しが明らかになって、ついに撤収を明らかにせざるを得なくなったのである。ただ３月10日といえば、森友学園が小学校の申請を取り下げた日であり、その翌日は土曜日で世論調査が行われる週末であった。安倍夫妻が関係していたのでは？と疑われる森友学園問題からマスコミの注意をそらさせ、世論調査での印象を良くしようとする姑息な目的が窺がえるタイミングであった。その後、森友学園問題では籠池氏の国会への証人喚問が決まり、稲田防衛大臣の虚偽答弁も明らかになり、自衛隊の日報問題では幹部自衛官の情報隠蔽、証拠隠滅が明らかになってきた。軍隊における情報隠蔽、偽情報は先の戦争で証明済みであるが、国会における総理大臣をはじめとする諸大臣の虚偽答弁は前代未聞である。民主主義とは何かが問われる危機的状態である。　（海野 順二）

４月の行動予定

１日(土) 13：30～	シズウエル 「共謀罪」学習会　平和委員会
８日(土) 13：30～	弁護士会館会議室 静岡県９条の会連絡会講演
９日(日) 12：00～	呉服町青葉公園 戦争法廃止宣伝、署名
19日(水) 17：00～	呉服町青葉公園 オール静岡アクション宣伝・パレード

風の子

『平和の遺伝子』（３）

佐藤 博明

この生徒文集を『平和の遺伝子』と名づけたのは、「戦争を知らない私たちが、戦争の体験を語り継ぐことで、〝平和の遺伝子〟を身体に刻み付けなければならない」、との思いからだという。かつての忌わしい記憶がしだいに風化し、「何気ない顔」をして戦争への道に誘い込もうとする力と動きを許さない、強い免疫力をもった〝平和の遺伝子〟をしっかり受け継ぐことの大切さである。現に、かつての治安維持法と生き写しの共謀罪の法制化が目の前にある。

この文集の特色は、日本に住む祖父母からだけでなく、アメリカ人の祖父や父から、はじめてベトナム戦争や湾岸戦争でのなまなましい恐怖体験と、その後遺症に苦しむ話を聞き、書き綴ったハーフの子どもたちの存在である。ある生徒は、戦場での体験を語るときの父親の苦しそうな表情や、ときには怒りっぽくなったりイライラする父の姿に戸惑い、戦争は決して過去のものではなく、日々の生活にも影を落としていることを実感し、「同じ過ちを繰り返してはならない」と書いている。それは、70数年前の世界大戦とは違う、ごく至近の戦争体験を聞くことでの切迫感とリアリティである。この文集を読み、戦争を現在進行形とする時代を許してはならない、との思いを強くしている。

松永安太郎さんのお話を聞いて

鈴木　正

「昭和20年8月、任務（特攻隊員）遂行前に終戦となった。天皇の言葉を講堂で隊員一同で聞き、悔しさいっぱいで、泣く者は一人もなく、机や椅子を蹴飛ばし、うっぷんばらしをし、部屋へ帰った。」と、松永安太郎さんは語っています。

〇なにに対しての悔しさだったでしょうか。特攻隊員として死ねなかった自分に対しての悔しさだったでしょうか。

〇うっぷんばらしは誰に対して、なにに対してのうっぷんだったのでしょうか。蹴飛ばされた机、椅子はなにの身代わりだったのでしょうか。

「庵原中学校（現清水東高校）で、軍事教官（叔父）より話を聞き、血潮が燃え上がり、洗脳され、軍国少年になっていった。」

「洗脳されているので、体当たりすることを恐ろしいとは思っていなかったので、遺書なども作成していない。」

この日の語りのなかで松永さんは「洗脳」という言葉を二度使っています。この言葉を松永さんが今日使う時、当時の自分をどういう思いでふり返っているでしょうか。

松永さんより八歳年下の私が進学した高校にも、学徒動員より旧制中学校に戻った先輩たちがいました。高歯の下駄で板張りの廊下を高々と音をたてて群れをなして歩くことしばしばでした。松永さん言うところのうっぷんばらしだったのでしょうか。

国民学校初等科四年生まで大日本帝国憲法下で学んだ私ですので、「洗脳」という言葉は戦後に知ったのはまちがいありません。

『花もひらかぬ一八のまま ― 沖縄戦で散った少年飛行兵の日誌』平野治和（編著）合同フォレスト（刊）を読みました。

少年飛行兵、平野利男は、大正15（1926）年11月生まれ、昭和20（1945）年4月28日戦死。

二人の少年飛行兵の生死を分けたのは生年の違い、新旧の憲法にめぐり合うことができたか、どうかです。この二人だけでなく私よりももっと年下の幼い人たちのなかに「洗脳」という言葉どころか、父母の名さえ知らぬ生後半年で死なざるをえなかった私の従兄弟もいます。

「日本ヨイ国、キヨイ国、世界ニ一ツノ神ノ国」に生まれ、学び、自分の人生を自分で生きることも許されなかった者たちの、苦しみ、痛み、悔しさ、怒りをこそ、今生きる私たちが学び、引き継ぎ、伝え、歴史を引き継ぐことだと思います。その思いにも、濃淡、深浅、強弱があります。引き継ぐ私たちにも、読みとり、聴きとり、書くことにも違いがあります。とてつもなく思い課題です。

「騙された」ことについて、つとに警告の言葉が発表されています。昭和21（1946）年8月

「そこで私は試みに諸君に聞いてみたい。『諸君は戦争中、ただの一度も自分の子に嘘をつかなったか』と。戦争中一度もまちがったことを我が子に教えなかったかと言いきれる親がはたしているだろうか。また、『騙されたということは、不正者による被害を意味するが、しかし、騙されたものは正しいとは、古来いかなる辞書にも決して書いてないのである。・・・私はさらに進んで『騙されるということ自体がすでに一つの悪である』ことを主張したいのである。」

「いくら騙すものがいても、だれ一人騙されるものがなかったとしたら、今度のような戦争は成り立たなかったに違いないのである。つまり騙すものだけでは戦争は起こらない。騙すものと騙されるものとがそろわなければ戦争は起こらないということになると、戦争の責任もまた（たとえ軽重の差はあるにしても）当然両方にあるものと考えるほかないのである。」（伊丹万作）

二人の少年飛行兵を含め、諸先輩たちに不遜な言動かもしれません。「教育勅語が言っている日本が道義国家を目指すべきだという精神は、目指すべきだという考えは今も変わっていない」。もっとも「道義」という言葉をつかうのにふさわしからぬ人が迷い出て、安倍内閣はその大臣を擁し、その内閣が国民の半数余の支持を得ている（世論調査）今だからこそ、何度でも学びなおしたい警告と考えます。

私たち自身の学び方、生き方にもかかわる言葉です。右のような内閣でなく、日本国憲法を私たちのものとするためにも、だれかに答えを求めたり、どこかを探すことでなく、拙い歩みであろうと、「自分」の言葉を持ち寄る以外にないのではなかろうかと考えます。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前号22号2頁、松永安太郎さんの「洗脳されて特攻隊に」に誤りがありました。4段目・10行、靴下は石鹸を入れて→石鹸箱を入れて

4段目・15行、講話などで自然に洗脳される→講話などで自然に洗脳されて行く。

お詫びして訂正します。

---

①　反戦不穏歌詞

静岡県清水警察署管内各中等学校、国民学校生徒児童間に左の如き反戦不穏歌詞流布されつつあるを探知す。（昭和19年3月）

一、一城焼けた、二城焼けた、三城焼けた、四城焼けた、五城焼けた、
六城焼けた、七城焼けた、八城焼けた、九城焼けた、日の丸吹っとんだ

二、昨日生れた豚の子が　蜂にさされて名誉の戦死
豚の遺骨は何時帰る　四月八日の朝帰る　豚の母さん悲しかろ
昨日生れた蜂の子が　豚に踏まれて名誉の戦死
蜂の遺骨は何時帰る　四月八日の朝帰る　蜂の母さん悲しかろ

棒切れ振り振り（2）

歌もまた心に種を蒔くものであり、心のこやしです。

右の替え歌のうたわれた時代には「心に種」をまかれては「世界ニ一ツノ神ノ国」が困りました。

「ああ堂々の輸送船／さらば祖国よ栄えあれ／遥かに拝む宮城の／空に誓ったこの決意」（映画『暁に祈る』の主題歌、作曲・古関祐而）

①の「反戦不穏歌詞」の替え歌を遠州の田んぼのガキ共も歌いました。それがなんと、清水で大阪で、全国で歌われたというのですからびっくり。「探知」したその筋は「関係方面へ防止方指示警告す」とあります。遠州の田んぼにはなんの沙汰もありませんでした。

（①の二）の替え歌が大阪では次のように歌われたといいます。

昨日生れたタコの子が
タマにあたって名誉の戦死
タコの遺骨は何時帰る
骨がないので帰れない
タコの母ちゃん悲しかろ

『湖畔の宿』の替え歌です。作曲者の服部良一はその自伝で「わが家でも子どもたちが父親の作品とも知らず、隣近所の友だちと一緒に、ゆうべ生れた豚の子が・・・などと替え歌を歌っていた」と書いているそうです。

全国のガキ共が歌っているとすれば、その筋も「不穏」を感じたでしょうが、世相がわかろうというものです。「共謀罪」のなによりの学習資料です。

不穏歌詞落書　富山県富山市新富町六八五　徴用工　八川健二（26）外徴用工三名

被疑者等は共作の上寄宿寮木戸に左記歌詞を落書し且つ放歌す。（昭和19年）

一、嫌ヂャ有リマセンカ徴用ハ　好キデ来タンヂャナイケレド
朝カラ晩マデ働イテ　一円五十銭ハナサケナイ
本当ニ本当ニ御苦労ネ

二、嫌ヂャ有リマセンカ徴用ハ　残業残業デ叩カレテ
ソレデ僅ノ五十円　ドウシテ女房ニ見セラレヨ
本当ニ本当ニ御苦労ネ（言論出版集会結社等臨時取締法違反として送局）

以上、『昭和特高弾圧史・5庶民にたいする弾圧』―より　鈴木　正